

中学校道徳 沖縄県郷土資料集

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索



未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

琉球大学教授
監修 上地 完治

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
※QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。



目次

1 おばあは喜劇の女王
— 仲田幸子なかださちこ — 2

2 平和の道をたどる起点
— ひめゆり平和祈念資料館きねん — 6

3 沖縄愛楽園を訪ねて
..... 10

4 伝統をつなぐ
— 琉球舞踊家宮城幸子りゅうきゅうぶぶようかみやぎゆきこ — 14

5 ルーツを訪ねて
— 世界のウチナンチュ — 18

6 世界自然遺産
..... 22



おばあは喜劇の女王 — 仲田幸子 —



太平洋戦争末期、住民を巻き込んだ激しい地上戦の戦場となった沖縄。人々は、苦しい復興の道を歩んでいました。何もかも失い、悲しみと苦しみしか残っていないかった収容所暮らしの中で、人々に笑顔を取り戻させ、生きる力を与えたものの一つが、歌やお芝居などの沖縄の芸能でした。



① 沖縄喜劇の女王、仲田幸子さん。戦後のウチナー（沖縄）芝居とともに人々に笑いを振りまいた喜劇の第一人者。その認知度は年齢性別を超えて、今も色あせていません。

那覇市で生まれた仲田幸さんは、子どもの頃は生活が貧しく、毎日苦しい日々をおくっていました。そのような中、唯一の楽しみは祖母に連れられ観にいった村芝居。きれいなすがい（格好）をして、お化粧をした役者さんの姿は輝き、自分もあそこ（舞台）に立ちたいという夢を抱き続けました。そして十五歳になった一九四七年、夢を現実のものにしたという思いから、役者を志願し劇団の門をたたき

15

10

5

ました。しかし、これといってなんのとりえもない普通の女の子を、まともに相手にするほど甘い世界ではないということを思いしらされたそうです。舞台までの道は遠く険しいものでした。

それでも、舞台役者の道をどうしてもあきらめきれず「どんなに小さな役でもいいから」と必死に座長に頼み込み、どうにか劇団に置いてもらいました。そして、迎えた念願の初舞台は、無銭飲食の人を止める役でした。もちろん、その役どころの名前もなく、セリフはほんの数行。でも、そのわずかなセリフや役柄も思ったようになり、舞台の裏でひっそり悔し涙を流しました。「こんな小さなことでへこたれるようでは、役者なんてとてもしやらないいなあ」と副座長に厳しく言われました。劇団には置いてもらいましたが、あいかわらず叱られてばかりで、褒めてもらえたことなどほとんどありませんでした。それでも、少しずつではありましたが舞台に立つ機会も増え、与えられた役は何でも無我夢中で取り組んでいきました。

ある舞台公演の時です。仲田幸子さんが滑稽に配役を演じていると、客席から笑いと拍手が湧いてきました。その時ふいに胸が熱くなり、舞台役者を続けてきた事に、大きな喜びを感じたのです。

当時、沖縄の舞台は伝統芸能が基本でした。ましてや滑稽に演じる喜劇というものはほとんどありませんでした。しかし戦後の混乱した時代に、人々が笑いを求めているという雰囲気の中、仲田幸子さんは感じていました。やがて、喜劇に取り組む事を真剣に考え始めま

20

15

10

5



②



した。以来、ひたむきな思いで重ねた稽古は、舞台芝居を見た人に、笑いで元気を与えられるという自信につながり、さらに喜劇を追求していく役者人生の転機にもなりました。その後、喜劇役者として歩みつづけた仲田幸子さんは、劇団の役者・脚本家の仲田龍太郎さんと結婚し、ともに一九五六年「劇団でいご座」を立ち上げ、のちに座長を継ぎながら、それでも一人の喜劇役者として一座を支えます。「劇団でいご座」は公演活動を積み重ね、やがて沖繩を代表する劇団へと成長してゆきました。一九七〇年代には、舞台公演はどこへ行っても大入り満員の大盛況、一か月に四十公演もこなしていきました。舞台上に携わっている関係者は口をそろえてこう言います。「仲田幸子さんには、にじみ出る面白さがあり、彼女の登場をみんなが待っている。そして舞台そこから出てきただけで会場が笑いに包まれる。」

15

仲田幸子さんの創る芝居は、驚いたことに台本はありません。台本の代わりに仲田幸子さんが「あんな、こんなこんなして言いなさいね。で、あっちからこう人が来るからその時はさあ……」と筋を言います。すべての台詞は仲田幸子さんの頭の中にあるのです。その独特のやり方に、戸惑う役者さんもいました。その一人が仲田幸子さんのお孫さんで、舞台役者の仲田まさえさんです。「型にはまらず、即興的な台詞や振る舞いにその場で合わせていくこと、そこに芸が磨かれる過程があり、笑いが飽きない理由もそこにあるのかも。」と語ります。「体調の悪い日でも無理をして舞台上に立っていたんだけど、舞台上上がると不思議と元気になれる

20



んだよねえ。点滴でも打ってきたかと思うくらいよ。やっぱり、芝居は『好き』だからどんな苦しい状況でも続けられたよね。これまでやめようと思ってたことは大げさだけど一度もないよ。それと、ここまでやってこれたのはお客さまをはじめ、ずっとついて来てくれた劇団のメンバー、家族や友人たちの支えも大きい。本当に感謝の気持ちでいっぱい。」

芝居一筋に生きて芸歴七十年以上、「喜劇の女王」の異名をもつ仲田幸子さんのもとには「元気がわいてきた」、「思いつきり笑えた」といった声が多く届く。

10

「沖繩で一番有名なおばあだよ。」
そんな声に励まされると同時に「笑って楽しんで

もらえたんだ」と安心する。
「みんなを楽しませることが私の生きがい、ヨロシクゴザイマス。」
いつもの「サチコー節」が笑顔をいざなう。

15

▼写真①②③
石川真生
『沖繩芝居 仲田幸子
一行物語』より

平和の道をたどる起点

—ひめゆり平和祈念資料館—

南国の一大リゾート地、沖縄。温暖な亜熱帯の気候やサンゴ礁の美しい海岸線など、風光明媚な風景を目にすると、ときに沖縄がこれまで歩んできた悲しい歴史を忘れてしまいそうになります。しかし、決して忘れてはならないもう一つの沖縄、それは日本で最大の地上戦があり、日米双方でおよそ二十万人が命を落とすという凄惨な経緯をした島であり、今なおその傷跡は県内各地に数多く残されている地であるということです。そのような戦争の悲惨さや恐ろしさ、そして命の尊さを次の時代へ引き継ぐために、戦跡や当時の資料の保存、そしてそれを伝える活動が今もお進められています。

皆さんは、ひめゆり平和祈念資料館に行ったことがありますか。

「ひめゆり平和祈念資料館」は、ひめゆり学徒隊に関する資料を保管・展示し、戦争の悲惨さを後世に伝えるため、一九八九年六月二十三日、ひめゆり同窓会を母体と



▲ひめゆり平和祈念資料館（奥）とひめゆりの塔

する財団法人が中心となって、糸満市にあるひめゆりの塔に隣接した場所に開館しました。

資料館には沖縄戦で動員されたひめゆり学徒の遺影や遺品、生存者の証言映像や手記が展示されています。ひめゆり学徒たちは十五歳から十九歳の女子学生で、なかには中学生のみなさんと同じ世代の子たちもいました。

また、ひめゆり学徒隊は看護要員として動員されましたが、その活動場所は後方の安全な所ではなく、戦場の陸軍病院で、暗い防空壕の中、負傷兵の看護や手術の手伝い、死体の埋葬など想像を絶する日々が二か月も続きました。

戦後、奇跡的に生き延びたひめゆり学徒隊の生存者は、多くの学友たちが戦火で命を落とした中、自分だけが生き残ったことに深い罪悪感を抱いて苦しみ、戦争体験を語ろうとはしませんでした。しかし、「戦争の記憶がこのまま風化していくのではないか、二度と戦争をくり返してはいけない、戦争を体験した私たちが、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、命の尊さを次の世代に引き継いでいくことが、必要ではないか」という意識が徐々に高まり、「沖縄戦でなくなった学友や先生のことを伝え、戦争や平和について訴える資料館を建設しよう」という運動になりました。

ひめゆり平和祈念資料館の展示制作には、元ひめゆり学徒らが携わりました。沖縄戦で多くの物が焼失し展示する資料も少なかったため、戦時中に過ごした壕に入って遺品を拾い集めたり、お互いの戦争体験を聞き取り、記録するなどして、展示しました。開館後、生存者は自らの体験を伝える活動を始めました。二〇〇四年には、若い世代に戦争の実態をより分かりやすく伝えるための全面的な展示リニューアルを行い、さらに平和について語り合える場を作りたい、という思いから「第六展示室 平和への広場」を増設しました。また、自分たちが活動できなくなるときを見据え、次世代の育成にも取り組みました。

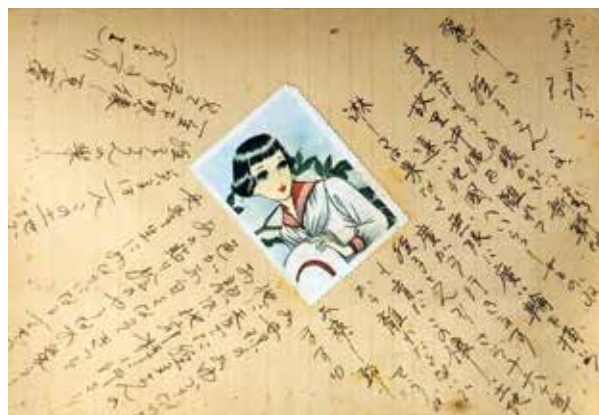
二〇二一年には開館後二回目のリニューアルが行われました。このリニューアルでは、「戦争からさらに遠くなった世代へ」をテーマとして、初めて戦後生まれの三十〜四十代の学芸課の職員が



▲寄宿舎の窓辺（1941年）

ひめゆり平和祈念資料館では、戦争体験者が年々少なくなっていく今、沖縄戦がどんなものであったのか、元ひめゆり学徒たちの証言映像や資料等を通して、いろいろな世代に戦争の実態を伝えています。戦争の悲惨さと命の尊さを考える意味でも、訪れてほしい場所です。

20



▲生徒のサイン帳

10

まれていく恐ろしさを深く考えてもらえるのではないかと説明しています。

資料館に寄せられた感想文の中には、「展示を見ても話を聞いてもピンとこない」という言葉もあるそうです。そのことについて、戦後世代で初めて館長を務める普天間朝佳さんは、「戦争から何十年も経つと、風化していくことは仕方ないことかもしれませんが、大切なのは、あらゆる機会を通して、繰り返

5

▲普天間朝佳さんの言葉
「戦争からさらに遠くなった世代」へ伝えるために」（資料館だより）第六十七号（二〇二一年六月二十三日発行より）



▲第一展示室「ひめゆりの学校」入り口

中心となつて、企画や構成を担当し、伝えるための表現方法を模索しました。展示写真についても工夫がなされました。これまでの写真展示では集合写真など堅い表情の写真も多くありましたが、リニューアル後の展示ではあえて生き生きとした表情や笑顔がわかるものを中心に写真を選び直しました。ロビーにかけられた大型のパネルの集合写真には、笑顔あふれる姿が見られます。また第一展示室入り口には、ひめゆりの生徒たちが相思樹並木を通過して学校に登校する様子を描いたイラスト、さらに進むと学校生活や授業風景の写真、丁寧にまとめられた数学のノート、当時のイラストのシールが貼られたサイン帳など、生徒一人一人の姿や思いが脳裏に浮かぶ展示内容となっております。資料館の学芸員、前泊克美さんは「今の中学生、高校生と変わらない学生生活を送っていた生徒が、戦場に動員され、戦火へ巻き込

20

15

10

5

夏休みに課題で出された社会科新聞の記事を何にしようか悩んでいた私に、母が「ハンセン病について書くのはどう。愛楽園に交流会館という資料館が完成したみたいよ。」と勧めてくれた。ハンセン病という病気については、学校でパンフレットが配られて知っていたし、公民の授業では、「らい予防法」が憲法違反だと訴えた裁判があったことも学習した。しかし、母に勧められてもなお、ハンセン病問題を調べるのは少し気が重く、躊躇している自分がいた。

愛楽園を訪ねた当日、資料館を見学する人は私と母の二人だけで、学芸員さんがつきつきりで案内してくれた。私は、最初の展示内容から衝撃を受けた。患者たちの中には、ハンセン病への偏見と差別から地域社会から排除されて隠れるように生活する人たちもいた。その患者たちが住む人里離れた小屋が、村の人々によって焼き討ちにあったというのだ。生活する人間がいるとわかっていながら火を放つ。そんなことまでするか。あまりにも衝撃だった。

「似たようなことは県内各地であって、療養所設置に反対する運動がいくつも起きました。自分たちの住む地域に患者が集められることに人々は恐怖を感じたんでしょね。」

と学芸員さんが教えてくれた。

この焼き討ち事件でなくなった者はいなかったが、そこで生活できなくなった患者たちは屋我地島沖の無人島で暮らすことになった。その無人島は地元住人にとっては、死者を風葬する場であったという。私が、ここに来るまでに見えたあの浅瀬の青い海のどこかに、そんな過去をもった島があったのか。

展示室を進むにつれ、私がハンセン病について「知っている」ことが浅い知識であることがよくわかった。ハンセン病は非常に感染力の弱い病気、すぐに治療できる。その証拠に、愛楽園ができてから、医師や看護師といった医療従事者にハンセン病を発症した者は一人もいないということ。「らい予防法」がある限り、患者を強制的に療養所に収容することができ、病気が治っても、療養所を出ることは許されなかったということ。

私は、患者の大切な人生を奪ったこの国の政策に大きな衝撃を受けた。

展示室の見学を終えた後、学芸員さんに愛楽園内の他の施設も案内してもらうことに



▲沖縄愛楽園の全景。青く美しい海に浮かぶ島にある



沖縄愛楽園
ウェブサイト



なった。

「他の施設って何だろう。療養所なんだから病院があるのはわかるけど……」なんて思いながら母と学芸員さんのあとをついてまわった。

愛楽園入口付近に旧面会室があった。復元された建物で患者と面会人を隔てる壁はガラス張りだったが、一時期は小さな窓が開いているだけの板壁だったそうだ。患者と面会に来た家族は、小窓越しに互いの顔を見つめることしかできなかったのだろうか。想像すると胸が痛んだ。

「次は納骨堂に案内しますね。」

面会室を出て、歩いていると波の音が聞こえてきた。施設の外側は海なんだと改めて思った。納骨堂に向かう途中で学芸員さんが歩きながら左側を指さして説明してくれた。

「ここは在園者さんの生活エリアです。ハンセン病は薬で簡単に治ります。現在、愛楽園にハンセン病患者は一人もいません。回復されているんです。でも、ここから出て行けない。子どものころに入所して、何十年とここで暮らす人もいます。帰る場所がない在園者さんたちも高齢化しています。」



▲復元された旧面会室

私は不意に、この地に納骨堂がある意味を理解した。納骨堂があるということは、死んでもなお、ここから出られないことを意味するのだ。ここに入所してくる人は家族との関係を断たれ、ふるさとを追われた人たちだ。なくなったあとお骨を取りに来る人がいない、ということなのか。

一生ここで過ごすことになる在園者は、施設内での結婚が認められていた。子どもを生まないことを条件に、だ。もし、子を宿してしまったら強制墮胎させられたそうだ。資料館でその体験談を読んだ。納骨堂の横に「声なき子供たちの碑」があった。この世に生を受けることなく死んでいった子どもたちをしのぶものだろう。

ここには、かつて小学校があった。たとえ幼少であっても一人で入所させられた子どもがたくさんいたということだ。売店も食堂も美容室だってある。かつては、自分たちの耕作地もあった。ここに何でも揃っているということは、「ここから出なくてもいいように」ということなのだ。



▲声なき子どもたちの碑

今日ここで見たこと聞いたことに私はショックを受けた。「病気の感染拡大を防ぐ」という大義名分のもとに、人を人として扱わない政策が行われていたことに。そして私たち人間はそんなことができてしまうということに。学芸員さんの最後の言葉が頭から離れなかった。

「患者さんたちがここに収容されたのは、『法律で決まっている』からだけでしょうか。彼らをここに縛りつけたものは何なのではないでしょうか。」

ハンセン病問題は決して過去の話ではなかった。新聞の記事を書くことをためらっていたのは、自分自身に向き合うことが怖かったのかもしれない。ハンセン病問題の本質を知ることが避けていたのかも。でも、今は違う。今日の体験を記事にしなくては。



▲沖縄愛楽園交流会館

伝統をつなぐ

琉球舞踊家 宮城幸子



那覇市に新しい劇場「なはーと」が設立され、開館のセレモニーが行われたときでした。来賓の方々による会場関係者を励ますスピーチが続く中、この人の言葉が光りました。

「宮城幸子です、今日からまた歩み頑張ります。」

誰かを励ますというよりも、自分自身が歩み続けるという言葉でした。

二〇二一年七月、琉球舞踊立方（踊り手）で初の人間国宝に認定されたのは琉球舞踊真流の宮城幸子さん。沖縄県の芸能関連では、これまで劇の領域としての組踊や、音楽の領域である三線や太鼓では人間国宝が誕生していましたが、舞踊の領域である琉球舞踊立方では初めてのことです。さらに琉球の芸能としては女性初となる人間国宝の誕生に喜びの聲が上がりました。

沖縄の伝統芸能である琉球舞踊は、一八世紀から一九世紀に栄えた琉球王国の宮廷舞踊として主に外交の場で踊られ、発展してきました。琉球古典音楽が流れるなかで、ゆつたりとした踊



▲人間国宝の認定書交付式。右は弟子で娘の宮城りつ子さん

▲琉球舞踊
沖縄県に伝わる舞踊の重要無形文化財に指定されている。

り姿にやわらかな歩き方や視線などの所作が入る姿には心をひきつけられます。

幸子さんは、芸能が盛んな羽地村（現名護市）親川に生まれました。地域を訪ねてきた人気の劇団や、当時名をはせていた踊り手の舞台を見たことが芸の道に進むきっかけだったと言います。

そして中学校の卒業式では踊りの経験もないまま「松竹梅」を踊ったときに、指導してくださいました方から「踊りが好きなら那覇に行きたほうがいい」と、ある人物を紹介されます。それが琉球舞踊隆盛の基礎を築いた踊り手で女性舞踊家の草分け的存在であった、真境名佳子さんでした。

那覇では子守や台所のお手伝いしながら踊りの正しい姿勢、基本の足運びを稽古する日々が続きました。師匠の真境名先生には「琉球舞踊は理屈ではない。ドゥーターサーニ ウビイリヨー（自分の体で覚えなさい）」と厳しく教えられました。

精神的にも肉体的にもとてもきつい稽古が続きましたが、それ以上に真境名先生の、琉球舞踊に対する情熱と踊りに対して真摯に向き合う姿は、とても魅力的でした。



▲真境名先生のもとで稽古に励んでいたころ

その師匠の教えを受け継ぎ、幸子さんはお弟子たちに同じように語りかけます。「リクツヤアランドー、ドゥーターサーニ ウビイリヨー（理屈じゃないよ、自分の体で覚えなさい）。言葉で言われたら頭で理解しようとするでしょう。でも、頭で理解したことがすぐに体で表現できるわけではないし、それには今日だけでなく、明日はできるとは限らないでしょう。だから、稽古を日々積み重ねな



▲舞台上立つ宮城幸子さん

家に琉球舞踊を指導しています。

「人間国宝に認定されたことに責任を重く感じています。素晴らしい先生方が伝統の技を守ってこられたからこそ今の技がある。「ドゥーターサーニ ウビイリョー（自分の体で覚えなさい）」という師匠の言葉を大事に、次の世代へ伝えていきたいと思っています。」

そこには、先達の残した琉球舞踊の心と技に真摯に向き合う幸子さんの姿がありました。

5



▲稽古場では島くとうばで所作を交えながら指導する

稽古場では、普段あまり聞き慣れない島くとうばが、聞こえてきます。

例えば、すり足の歩みの動作をイメージさせるために幸子さんは、次のように表現します。「シナヌ ナカンカイ アシイッテイ ウヌシナー トウバサングートウー アシン ジャセー（砂の中に足を入れ、その砂を飛ばさないように、足を出す）」またときには、「ハニーネー チカライレラングウトウー ヤファツテングワアー（はねるときは力を入れないでやわらかく）」と指導することもあります。

10

共通語のニュアンスでは言い表しにくい身体の流れを、島くとうばに所作を交えながら指導していきます。そのおかげで、お弟子さんの一人は「自分の身体の動きのイメージと実際の動きが一致してきた」と言います。琉球舞踊が生まれた時代の言葉、沖縄の文化の基礎となる島くとうばを使うことで、当時の技と心が受け継がれていくのだと幸子さんは語ります。

15

長く芸能活動を歩んできた幸子さんでしたが、道半ばで行きづまることもありました。「踊りやめようかねえと思ったとき時、好きな道、踊りが好きだからこそ、ここまでやるべきでした。自分には踊りの道しかなさ。続けられるかわからないけど、本当に好きな道であれば諦めはいけません。一にも二にも踊りの歩みを止めないことが大切。」

20

これが幸子さんの踊りに対する思いの原点となっています。

踊りの世界に入って七十年を超える今、宮城幸子さんは道場とは別に、大学や劇場でも若い実演

ルーツを訪ねて —世界のウチナーンチュ—

現在、世界には沖縄にルーツをもつ人（沖縄県系人）が約四十二万人（二〇一六年推計）も暮らしているといわれています。なぜ日本国内のみならず、世界にウチナーンチュがこんなにもたくさんいるのでしょうか。

大きな理由のひとつに経済的な事情があげられます。かつて沖縄の暮らしは貧しく、日本国内だけでなく海外まで出稼ぎに行ったり、移住したりする人が珍しくありませんでした。ある人は家族を助けるため、またある人は貧しい暮らしから抜け出すために、海外に希望を求めたのです。

「いざ行かん 吾等の家は五大州」。これは多くのウチナーンチュを世界に送り出し、移民の父と言われた當山久三の言葉です。「五大州」とは「世界」のことです。その言葉を表すかの

5

10

15



▲那覇港を出港する移民団（1962年）沖縄県公文書館所蔵

ように、たくさんの方々のウチナーンチュが沖縄から海を越え、遠く離れた新天地を開墾し、困難を乗り越えながら世界中に根を下ろしていきました。しかしそんな異国の地に暮らしながらも、ウチナーンチュは子や孫に故郷沖縄への思いを伝えていくことは忘れませんでした。ウチナーンチュのチムグクル（人を思いやる心）は、遠く離れていても強い絆で結ばれ、沖縄が貧しさにあえいでいるときには仕送りや救済物資を届け、第二次世界大戦後は沖縄の復興を経済的に支えました。

一九九〇年、沖縄県ではそんなウチナーンチュの功績をたたえるため、世界中で暮らす沖縄県出身者やその家族を沖縄に招き、県民との交流を通してウチナーネットワークを拡大・発展させ、アイデンティティやルーツを確認し次世代に継承しようと「第一回世界のウチナーンチュ大会」が開催されました。

それ以来、大会はおおむね五年に一回開催され、回を重ねるごとに規模も拡大していきました。そして沖縄県出身の一世から二世、三世へとその思いは受け継がれ、現在では大会に参加する若者の数も増えました。沖縄に集った世界のウチナーンチュは「自分のルーツや沖縄の文化を知りたい」「沖縄にいる親戚を訪問したい」「先祖の墓参りでウートートー（お祈り）がしたい」など、それぞれが思いをもってやってきます。

大会期間中、メイン会場では沖縄に関する音楽や舞台劇、琉球舞踊やエイサーなどの伝統芸能、沖縄と海外の関係についてのシンポジウム、海外の物産展など、さまざまな催し物が行われます。また、メイン会場以外でも、自分のルーツを求めて親の出身地を訪ねたり、親戚との再会を果たすなど、地域レベル・親族レベルでの交流も盛んに行われます。

二〇一六年には、このようなことがありました。

沖縄県系三世の比嘉・アンドレス・オスカルさん（アルゼンチン出身）と沖縄県系三世の伊佐正・アンドレスさん（ペルー出身）は、沖縄で知り合いました。生まれた国は違っても、同じウチナーンチュとして出会った比嘉さんと伊佐さんは、大会に参加し「イチャリバチョーデー」（出会っ

15

10

5

20



▲第7回世界のウチナーンチュ大会にも多くのウチナーンチュが参加（2022年）

とも心地いい体験だと言います。伊佐さんはご先祖に感謝する気持ちの強いところが沖縄のいいところだと考えています。自分もご先祖さまに感謝して恩返ししたい、という気持ちがウチナーンチュ大会の行動につながっていると語ります。ウチナーンチュのチムグクル（人を思いやる心）は確実に受け継がれています。

10

5

第7回世界のウチナーンチュ大会▶
（2022年）公式ロゴマーク



▲「世界ウチナーンチュの日」の制定を提案した比嘉さん（左）と伊佐さん（右）（2016年）

る心に出会い、沖縄に住もうという心が芽生えたといいます。大会に参加して、任んでいる国は違っても「おかえり」「ただいま」と笑顔で自然に交わす言葉。自分の中の沖縄を実感する、なん

た人はみんな兄弟、「チムグクル」（人を思いやる心）、「ユイマール」（みんなでつながって助け合う）など、世界に誇れる素敵なウチナー文化と、その文化を継承しているウチナーンチュの存在を世界中に感じ、誇らしく思えたそうです。

そして海外のウチナーンチュと沖縄のウチナーンチュ、沖縄を好きな人が心をつなげて祝える日があったらどんなに素晴らしいだろうかと話し合いました。そこで二人は「ウチナーンチュ」であることを誇る記念日、「世界ウチナーンチュの日」の制定を提案しました。

二人の熱心な働きかけはすぐに多くの賛同を呼び、「第六回世界のウチナーンチュ大会」において、十月三十日を「世界のウチナーンチュの日」として制定することが宣言されたのです。

比嘉さんはもともと学費を稼ぐためにアルゼンチンから日本に来ました。そして帰国前の二〇〇七年に、初めて沖縄の親戚に会いに行つたところ、沖縄の誰に対しても温かく迎え入れて

20

15

10

5



▲イリオモテヤマネコ © OCVB

二〇二二年七月二六日、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界遺産委員会は「奄美大島、徳之島、沖縄本島北部及び西表島」を世界自然遺産に登録することを正式決定しました。この四島の大部分は亜熱帯の森林で、アマミノクロウサギやヤンバルクイナ、ノグチゲラ、イリオモテヤマネコなど多くの生物が閉ざされた島の環境下で生き延びてきました。現在、これらの島には絶滅危惧種九十五種（うち七十五種が固有種）の生息が確認されています。島の成り立ちを反映した希少な固有種に代表される「生物多様性」の保全上重要な場所であることが評価されたのです。

沖縄の自然が世界遺産に登録されたことを私たちは喜ぶべきでしょうか。私たちは、今回の世界自然遺産登録をどのように受け止めるべきでしょうか。ここで西表島に在住のお二人の声を紹介します。

イリオモテヤマネコは世界で一番小さな島に棲むネコ科の野生動物です。西表島という小さな島で二千四百人も人間と共存しながら、人間に依存することなく一定の距離をとって暮らしています。これはとても奇跡的なことです。

イリオモテヤマネコは小さな西表島で生き延びるために何でも食べるといふ生態を獲得しました。およそ八十種の生き物を食べているといわれていますが、世界にこれほどたくさん種類の生き物を食べるネコはいません。西表島の豊かな自然がイリオモテヤマネコと人間の共存を支えているのです。イリオモテヤマネコがいつまでも野生の状態で生きていけるよう、そして人間と共存しているよう西表島全体の生態系を守っていくというのが、僕たち「やまねこパトロール」の活動理念です。

世界遺産の本来の目的は、「推薦した国と地域が世界的な価値をもつ世界遺産を守っていくと世界に約束する」もので、登録されればユネスコが全部何とかしてくれるというものではありません。むしろ、島に住んでいる人や、訪れる人たちが島の自然を守っていく責任を負うというものです。そのため、世界遺産に登録されたことよりも、これからどういった取り組みをしていくかの方がはるかに重要です。西表島の大きな課題は、受け入れられる限界以上の人が島を訪れてしまい、イリオモテヤマネコの交通事故が増えたり、水道水が不足してしまうなど、様々な問題が起きてしまう過剰観光（オーバーツーリズム）です。世界遺産「西表島」がいつまでも世界的な価値を持ち続けられるかはこれからの取り組みにかかっていると云えます。

トラ・ゾウ保護基金 西表島支部やまねこパトロール事務局長 高山雄介さん

僕の活動をいつかは島で生まれ育った子どもたちがやってくれたらいいな。





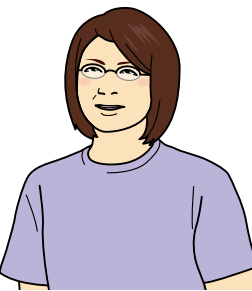
▲イリオモテヤマネコの飛び出しを注意する道路標識 写真提供：共同通信社

みなさん、考えてみて下さい。西表島は生活の場でもあります。「希少な動植物が住む森を塰で囲って保護します」というわけにはいきません。我慢するだけで自然と人間が共存していると言えるのでしょうか。どうすればみんなが気持ちよく自然とともに暮らすことができるのでしょうか。

5



▲仲間川流域の風景 © OCVB



自然体験をしてください。
沖縄ならどこだって素敵な
自然があるはずですよ。

西表の場合、何千年前から人の暮らしがそこにあって、自然の恵みをいただきながら暮らしてきたわけです。しかし、現代社会ではこの自然との共生が難しくなっています。道路ができて自動車があればヤマネコが事故に遭いますし、森の恵みを自分が食べる分だけ採取していた時は自然は減らなかつたけれど、それ以上に利用すれば減ります。これからは、自然と人々の生活のバランスをどうやってとっていくかを考えなくてはいけないのかなと思います。

私たちの組織は、地域の人、子どもたちへの普及啓発活動や環境保全を目的にビーチクリーン、海洋ごみの調査、動植物のモニタリングなどを行っています。また、遺産登録後、観光客増加が考えられるので、観光のルールづくりを行政と一緒に取り組んでいます。

最近「観光に来られる方にとってほしいですか」とよく聞かれます。近年、「責任ある観光」が言われるようになってきて、観光客の意識も変化したように感じますが、完璧とはいえません。だからといって「あれをやっちゃだめ」みたいに押し付ける形にはしたくないなと思っています。観光客が気持ちよく「イリオモテ」を守る行動につながる仕組みづくりが必要です。そのためには、島の人たちがどれだけ「イリオモテ」を守りたい気持ちを持っているか、守る行動をしているか、それを伝えて共感の輪を広げていくやり方がいいのかなと思っています。

NPO法人 西表島エコツーリズム協会 理事 徳岡春美さん

15

10

5

この「沖縄県郷土資料集」は、下記の手順でダウンロードして下さい。

日本文教出版 ホームページ



教科書・教材



中学校道徳



沖縄県郷土資料集

中学校道徳 沖縄県郷土資料集

日文 教授用資料

令和5年(2023年)1月31日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD 33628

日本文教出版 株式会社
<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690